

小江戸松江：土壌（農業）立地の生活・行楽・観光のための応用

地域環境科学科 准教授

長縄 貴彦

研究成果の概要

ミッション再定義の趣旨や、分担テーマである「陸域における、資源・環境の保護・保全」にのっとり、「島根県農業技術センターとの意見交換会」で発表したタイトルである上記表題が、主となる研究成果である。

しかし、これは同時に「造成地土壌の低生産・低増殖部位が生む多様な付加価値」の研究の一部でもある。人類は自らにとって複雑過ぎ雄大過ぎる自然の凝縮（縮小）投影や、過去の記憶の投影など、人間が自然を理解するために重要な、大きさや時間を跨ぐ投影を行ってきた。それは生産という大目的こそが重要であったが、同時に周辺における低生産・低増殖な部位においても、人類と自然との巧妙な共生関係が営まれていた。例えば締め固められた土壌で、雑草やコケ植物がささやかに生育する生態系など、長い歴史と大多数の人々にとっては、取るに足らないものではあるものの、別の観点では重要な生態系であった。

このような観点から、昨年度から今年度にかけては、特に、日なたでコケ植物が繁茂する造成地土壌を研究し、コケ植物の繁茂状態の観点から、種子植物土壌という当たり前の土壌を見直すということを行った。

さらに特定の植物群だけでなく、農村や都市の特定の土地利用群という観点で見れば、造成地土壌の低生産・低増殖部位は、直接的には金銭に換算できないまでも、多様な付加価値を生んでいる。特に人間の文化的活動は個別には対して価値のない物や事象を組み合わせることで人間固有の価値を生み出しており、この面でも低生産・低増殖部位が、自然を基にした人間の創造力を生み出す源泉となっている。

【学会発表】 関連する研究テーマとして学会で発表したもの：I. 「日なたでコケ植物が繁茂する造成地土壌ーコケ植物の繁茂状態から見る種子植物土壌」(2015日本土壌肥料学会京都大会)、II. 「旅」や「眺め」などの時空間変異認識から生まれるものー2. 景観・ニッチェ・「空」・「土壌」に関する類推と対比(2015日本土壌肥料学会京都大会)

社会への貢献・その他

松江や山陰の潜在的価値を「見える化」ということは、住んでいる人や新たに住む人にとって、価値を実感し創造的な楽しみを探し生活や行楽を楽しむ原動力になる。まわりまわって観光業の発展や人口増につながる。

図 凝縮投影の魅力

土壌（農業）立地の生活・行楽・観光のための応用（適地適作から適地適楽（適得））



絵（上4枚）県立美術館ホームページ
写真（下4枚）松江市内・筆者撮影